

# Gopadattajātakamālāに見られる śabdālaṃkāra について\*

山崎 一穂

## 1 はじめに

仏教詩人 Gopadatta の *Jātakamālā* (GJM) は Āryaśūra (四世紀頃) に始まるジャータカ・マラー文学の最後を飾るサンスクリット仏教文学作品である。この詩人 Gopadatta は、その作品に詩人 Haribhaṭṭa と Candragomin (ともに五世紀) の作品の影響があり、八世紀末から九世紀初頭にチベット訳された *Prajñādaṇḍa* に一節が引用されていることから、五世紀から八世紀の間に活動した人物であることがわかる。しかしこの他に彼について知られていることはほとんどなく、彼がどのような文学的環境の中で著作活動を行ったかという問題は明らかにされていない。この問題を解明すべく、YAMASAKI [forthcoming] では、Gopadatta の物語作品 *Saptakumārikāvadāna* で使用される〈音の飾り〉(śabdālaṃkāra)、特に同音節群の反復技法の用例を取り上げ、五世紀以降の詩論家の規定と照合し、詩人達の実作品に類例が見られるか否かを検証した。その結果、Gopadatta が *Saptakumārikāvadāna* で用いる同音節群の反復技法は詩論家の規定に沿わないが、七世紀以降のヒンドゥー教詩人達の戯曲作品に多数類例があり、彼がそれを参照していた可能性があることが判明した。本論はサンスクリット原典が残る Gopadatta のもう一つの物語文学作品である GJM に見られる同音節群の反復技法の用例を取り上げ、その用例からも同じ可能性を指摘することができるか否かを検討するものである。

## 2 GJM に見られる同音節群の反復の用例

YAMASAKI [forthcoming] では Gopadatta が *Saptakumārikāvadāna* で用いる同音節群の反復技法は次の四種類に分類されることを明らかにした。

- (a) 詩節の一部が複数回異なる意味で反復されるもの — 〈同音節群反復〉(yamaka)
- (b) 同じ意味を表示する語が詩節中で異なる〈意図〉(tātparya) で反復されるもの — 〈ラータ同子音反復〉(lāṭānuprāsa)
- (c) 詩節中の音節群が複数回異なる意味で反復されているが、対をなす音節群が厳密には同一でないもの — 〈疑似同音節群反復〉(pseudo-yamaka)
- (d) (a) と (b) を区別せず、同じ音節群を反復しているもの

*Saptakumārikāvadāna* における以上四種の用例を分析すると次の特徴が指摘される。(1) (a) の用例に比べ (b) の用例が多い、(2) (d) の用例では正確に同じ音節群が反復されない場合があることである。以上の特徴は GJM で用いられる同音節群の反復技法にも確認できるか。用例を検討しよう。

GJM は全 15 話からなると推定される物語作品であるが、我々は現在それを完全な形で見ることができない。しかし中世ネパールで編纂された *avadānamālā* と総称される説話文献群に GJM の一部と推定される梵文原典が引用されており<sup>1</sup>、未校訂の三話 (Mātrpoṣaḥastin, Suprabhāsa, Śvan) と

\*本論を著すにあたり日本学術振興会特別研究員の川村悠人氏からパーニニの文法体系に基づく viśādin の語義派生について御教示いただいた。また公益財団法人中村元東方研究所専任研究員の友成有紀氏から kṛt 接辞 Kta の用法についてパーニニ文法家が定める規定について御教示いただいた。記し御礼申し上げる。

<sup>1</sup>GJM 全 15 話が引用されている写本については HAHN [2007a] を参照せよ。注意すべきは、GJM 所収の物語は Āryaśūra や Haribhaṭṭa の *Jātakamālā* と異なり、物語の全てが六波羅蜜の例証を目的としている訳ではないことである。また \*Ajātaśatru, Bhavalubdhaka, Megha, Puṇyārāśi, Rṣipaṇcaka の五話は物語形式としてのジャータカにもアヴァダーナにも属さない (HAHN [2007a: 1048–1050])。

散文部を失っている一話 (Puṇyārāśi) を除いた 11 話 (Jñānavatī, Maitrakanyaka, \*Ajātaśatru<sup>2</sup>, Bhavalubdhaka, Matsarananda, Ṛṣipaṇcaka, Sarvaṃdada, Sārthavāha, Mega, Nāga, Kapīśvara) の原典についてほぼ原型に近いものを回収できる。これら 11 話の韻文部で用いられている同音節群の反復技法の種類とその用例数を示したのが以下の表である<sup>3</sup>。

	(a)	(b)	(c)	(d)
Jñānavatī	1	0	2	0
Maitrakanyaka	1	17	0	0
*Ajātaśatru	1	2	1	2
Bhavalubdhaka	3	1	2	2
Matsarananda	4	2	1	0
Ṛṣipaṇcaka	4	5	1	0
Sarvaṃdada	2	0	0	0
Sārthavāha	1	0	1	0
Mega	1	6	4	1
Nāga	2	0	3	0
Kapīśvara	1	2	0	0
	21	35	15	5

(a)–(d) をあわせた同音節群の反復技法の用例数については物語によってばらつきがあるものの、その内訳を見ると、*Saptakumārikāvadāna* における同音節群の反復技法の用例と同じく、〈ラータ同子音反復〉の用例数が最も多く、〈疑似同音節群反復〉の用例数も全体の二割近い比率を占めていることがわかる。これらの同音節群の反復技法が GJM に含まれる 11 の物語のどのような文脈で用いられており、どのような反復の形をとっているか。原文には語義や連語関係を理解し難い箇所もあるが、詩節を一つずつ提示し読み解きながら検討しよう。

## 2.1 Jñānavatī

Jñānavatī は 60 の詩節と短い散文部からなる物語であり、初期大乘経典 *Samādhirājasūtra* (『三昧王経』) 第 34 章に並行話が見られる<sup>4</sup>。この物語は、ジニャーナバラ (Jñānabala) 王の娘ジニャーナヴァティー (Jñānavatī) が重い病に罹った比丘を救うために自分の体を切り刻んで血と肉を布施したことを伝える、典型的な施身物語の一つである。同音節群が反復されている詩節の数は少ないが、ジニャーナヴァティーが血と肉を比丘に施して息絶えたことを物語る第 29 詩節、第 34–35 詩節に三箇所の用例を見ることができる。

[Jñānavatī 29, 34–35]

taṃ saukumāryātiśaṃ viditvā mṛṇālavalīvalayopamānam |  
 acetanasyāpi jaḍasya śaṅke khaḍgasya śaṅkāśīthilaḥ pracāraḥ || 29 ||  
 dharmānurāṅgāṅguligauravāc ca kāyānabhiṣvaṅgatayā tayā ca |  
 saṃlakṣayāmāsa na sā pramāṇaṃ māṃsasya rāśiṃ vipulaṃ cakāra || 34 ||  
 kṣīṇāpy akṣīṇadhairyaśau reje svarudhīraruṇā |  
 prabhātasamḍhyākiraṇaiś candralekheva rañjitā || 35 ||

[29] 思うに、ちょうど蓮華の〔雄蕊を〕囲む花糸のようにその弱さが並ではないのを知り、動くこともなければ、まして意識を持つことすらないはずなのに、剣が〔彼女を害することに対する〕ためらいから不承不承ながら現れたのだろう。

<sup>2</sup>\*Ajātaśatru のテキストはネパールに伝わる写本ではなく、Rāhula SĀMĀKṚTYĀYANA がチベットで発見した写本に伝わっている。この物語を Gopadatta の作と見なすことができる理由は、本話の詩節と全く同じ詩節が GJM 中の一話 Suprabhāsa に 20 詩節見られるからである。なお本話は第 79 詩節の a 句で中断しているので物語の題名が記された奥書を欠いているが、HAHN [1981] は \*Ajātaśatru が最もありうる題名であろうと推定する。

<sup>3</sup>GJM に見られる〈音の飾り〉の用例は HAHN [1980: 143]、HANDURUKANDE [1984: (45)–(47)] に列挙されている。本論は両者に負う所が大きいのであるが、残念なことに両者は mandam mandam や tataḥ tataḥ といった同語の反復の用例を〈ラータ同子音反復〉の用例とないまぜにして提示しているので、慎重に参照する必要がある。

<sup>4</sup>GJM 所収話と *Samādhirājasūtra* 所収の並行話との関係については EHLERS [1980: 2–9] を見よ。

[34] 仏法を愛する者 (= 比丘) の〔足の〕指を尊ぶがゆえに<sup>5</sup>、その〔自分の〕身体に対する無執着ゆえに、彼女は適当な分量を知らずに、おびただしい量の肉の山を作った。

[35] 彼女は命尽きてしまったけれども、彼女の抱いていた堅い意志はくじかれることがなかった。彼女は自分の血で赤く染まり、輝き始めた薄明の幾筋もの光線で染められた三日月のように見えた。

第 29 詩節と第 35 詩節ではそれぞれ śaṅke (< 動詞語根 śaṅk 「想像する」) の一人称・単数・現在・反射態) と śaṅkā 「懸念」、kṣīṇa 「壊れた」とそれに否定辞 nañ が導入された akṣīṇa 「くじかれることのない」という語で音節群が反復されているが、対をなす音節群は正確には一致しない。従って両者は〈疑似同音節群反復〉にあたる。第 34 詩節では anabhiṣvaṅgatā 「無執着」の具格・単数形と指示代名詞 tad の具格・単数・女性形で ta-yā という音節群が異なる音節を介在せず反復され〈同音節群反復〉を構成している。

## 2.2 Maitrakanyaka

次に Maitrakanyaka を見よう。この物語は北伝仏教に伝わる、ブッダの前生マイトラカニヤカ (Maitrakanyaka) の伝説を改稿したものであり<sup>6</sup>、144 の詩節と散文部からなるが、それぞれ海と山の情景を描写する第 56–57 詩節、第 71–73、76 詩節に 17 箇所〈ラータ同子音反復〉の用例が見られる。

[Maitrakanyakāvadāna 56–57]

tuṅgataramaṃgasamudgatatīraṃ tīranilīnakalasvanahaṃsam |  
 haṃsanakhakṣatadāruṇamīnaṃ mīnavivartitakampitavelam ||  
 ratnalatāvṛtabhāsuraśaṅkhaṃ śaṅkhasitendugabhastivivṛddham |  
 vṛddhabhujamaṅgamahāhavaraudraṃ raudramahāmakarāhatacakram ||

[56] 高い波の中から岸が現れ、ハンサ鳥達が岸に棲みついて甘い鳴き声を発し、恐ろしい魚達がハンサ鳥達の爪で傷を負い、魚達によって沿岸が渦を巻いて波立ち、

[57] 輝く法螺貝が一連なりの宝珠に覆われ、法螺貝のように白い月の光で潮が満ち、成長した蛇達が交える激しい闘いで人を寄せ付けず、人を寄せ付けない巨大な海獣によって一群の〔波〕が打ち付けられる〔海へとマイトラカニヤカ菩薩は入って行った。〕

[Maitrakanyaka 71–73, 76]

capalānilavellitapuṣpataraṃ tarumandiramūrdhni caladbhramaram |  
 bhramaradhvanipūrṇaguḥākuharaṃ kuharasthitaraudrabhujamaṅgakulam || 71 ||  
 pakṣivirājītaparvataśṛṅgaṃ śṛṅgaśilātalasaṃsthitasiddham |  
 siddhavadhūjanaramyanikuñjaṃ kuñjaniṣevitamattaśakuntam || 72 ||  
 mattaśikhaṇḍikalasvanaramyaṃ ramaṃyaguḥāmukhanirgatasimham |  
 simhaninādabhayākulanāgaṃ nāgamadāmbusugandhisamīram || 73 ||

<sup>5</sup>EHLERS [1980: 40] は a 句を „aufgrund der Schwerfälligkeit ihrer Finger, die durch die Hinneigung zum Dharma verursacht war,“ と解釈する。しかし「法を愛すること」がどうして「ぎこちない指の動き」の理由になるのか説明できているとは思えない。また gaurava は通常 „Schwere“ 「重さ」、 „Wichtigkeit“ 「重要性」、 „Ehrwürdigkeit“ 「尊敬に値すること」の意味で用いられる語である。aṅguligaurava が指するのは「〔足の〕指を重んずること」すなわち「比丘の足が頂礼に値すること」ではないか。従って dharmānurāga を dharme 'nurāgo yasya 「法に愛着する者」すなわち「比丘」という属格所有複合語と考えれば、「法を愛着する者の〔足の〕指は尊敬に値するがゆえに〔一心に自分の体を切り刻み肉の山をつくった〕」と解釈できるのではないか。

<sup>6</sup>マイトラカニヤカ伝説の諸伝本に関する研究については山崎 [2016: 369, fn. 17] を参照せよ。

phalitāmalabhūṣaṇakalpatarūṃ tarukhaṇḍavirājitasānuśikham |

śikharasthitadevavadhūmithunam mithunair dahatām(?) vayasām madhuram || 76 ||

[71] 花々を咲かせた木が強い風を受けて揺れ、蜂達が木々という棲家の上をとびまわり、蜂達の羽音が洞穴の中に響き渡り、一群の恐ろしい蛇達が〔洞穴の〕中におり、

[72] 山の峰々が鳥達のせいで美しく見え、峰々の岩場にシッダ達が集まり、茂みがシッダ女達の楽しみの対象とされており、酔った鳥達が茂みを訪れ<sup>7</sup>、

[73] 酔った孔雀が発す甘い鳴き声のために楽しみの対象とされ、楽しみの対象となる洞穴の入り口から獅子が出、獅子が吼える声のせいで象達が恐怖でいっぱいになり、象達のこめかみから流れる液でそよ風が薫り、

[76] 如意樹がマンゴーの実のような諸々の飾りを実らせ、一群の木々で山の峰々が輝き、二人連れの天女が頂に立っており、鳴き声をもらす鳥達のつがい心地よい〔山をマイトラカニヤカは見た<sup>8</sup>。〕

第 76 詩節 b 句末と c 句頭を例外として、全ての詩節の脚末の語が異なる〈意図〉で後続する脚頭の語によって反復されている<sup>9</sup>。第 56 詩節を例に説明するならば次の通りである。a 句末の tīra 「岸」は海と関係する「岸」であるのに対し、b 句冒頭のそれはハンサ鳥が棲む場所としての「岸」である。b 句末の haṃsa 「ハンサ鳥」は甘い鳴き声を発す主体であるのに対し、c 句冒頭のそれは爪の所有者である。c 句末の mīna 「魚」はハンサ鳥に傷つけられる対象であるのに対し、d 句冒頭のそれは沿岸を渦巻かせ波立たせる主体である。この〈ラータ同子音反復〉の類例は *Haribhaṭṭajātakamālā* 第六章第 42 詩節に見られる（テキストは HAHN [2011] のそれに従う）。

[*Haribhaṭṭajātakamālā* 6.42]

āruhya so 'tha maṇicāru narendrasimhaḥ simhāsanam nṛpanamaskṛtapādapadmah |

padmānukārivadanah pravivekadharmo dharmam dideśa paramārthaphalam janāya ||

さてその蓮華のような顔をした、優れた弁別能力という特性をそなえた獅子のような王は蓮華のような足に諸王から礼拝を受けてから<sup>10</sup>、宝珠で魅惑的な獅子座にのぼると、究極的な真実という果をもたらす法を人々に教示した。

従って Gopadatta が以上の〈ラータ同子音反復〉の技法を GJM にとりいれた可能性も考えられる。しかし上掲詩節は (1) 情景を描く一連の詩節の中で用いられていない、(2) c 句末と d 句頭の語が異なる意味を表示しているという点で GJM の例と性格を異にすることに注意せねばならない。

<sup>7</sup>KLAUS [1983: 61] は d 句を „in dessen Gebüsch sich ausgelassene Vögel niedergelassen hatten“ と解釈する。しかし用例の点で問題が残る。なぜなら niṣevita が複合語の後分要素となる場合、通常「x が訪れた」、  
「x が抛り所とする」という具格限定複合語となるからである。しかしそうすると、ここでの前分は kuñja  
「茂み」であるから、d 句が「茂みが抛り所とする酔った鳥達がそこ (= 山) にいる所の〔山〕」という意味を  
表示することになり意味不明である。Gopadatta は kuñjeṣu niṣevitā mattaśakuntā yasmin という複合語分析を  
念頭に置いていたようであるが、用例上支持されない。

<sup>8</sup>原文疑問。dahatām 「燃える」は文脈に合わない。KLAUS [1983: 63, fn. 92] はこれを rudatām もしくは  
nadatām と読むべきかと推定する。本訳ではこの推定に従ったが、動詞語根 rud もしくは nad 「吼える」が  
「鳥」とその類義語と一緒に用いられる用例は管見の及ぶ限り見られない。

<sup>9</sup>第 57 詩節 b 句末と c 句頭、第 72 詩節 c 句末と d 句頭では句末の語に前接辞が導入されているので厳密には同一語とは言えないが、異なる意味を表示しておらず、前接辞は単に詩脚の音節数を埋める目的で導入されているとしか考えられないので〈ラータ同子音反復〉に分類した。

<sup>10</sup>praviveka は通常「世俗を離れること」、「世俗との関係を断つこと」を意味する語である。しかしここでは dharma 「特性」が後分要素となっているから意味が通じない。ここでの praviveka は prakṛsto vivekaḥ  
「優れた弁別能力」という prāditatpuruṣa に分析されるべきではないか。この解釈をとれば、問題の複合語を  
praviveko dharmo yasya 「優れた弁別能力という特性を有する〔彼〕」という属格所有複合語として理解できよう。

これに対し詩論家 Udbhaṭa (八世紀) が *Kāvyaḷaṃkārasārasaṃgraha* で例示するものは GJM に見られるものにより近いと言うことができる。原文は次の通りである (テキストは BANHATTI ed., Poona: The Bhandarkar Institute Press, 1925 のそれに従う)。

[*Kāvyaḷaṃkārasārasaṃgraha* 1.\*8]

kvacid utphullakamālā kamalabhrāntaṣaṭpadā |  
ṣaṭpadakvāṇamukharā mukharasphārasārasā ||

或る所では睡蓮が花開き、睡蓮の花々を蜂達が飛び回り、蜂達が奏でる羽音で騒がしく、騒がしいサーラサ鳥でいっぱい [秋の気配となった]<sup>11</sup>。

定動詞を欠く情景描写の詩節に〈ラータ同子音反復〉が用いられている点、脚末と脚頭の語が全て同一義で用いられている点で GJM の用例と同じである。先行する脚の末尾の音節群を後続する脚の冒頭の音節群で反復する〈同音節群反復〉の例は詩論家 Daṇḍin の *Kāvyaḷadarśa* 第三章第 51 詩節に現れ *saṃdaṣṭa* の名で呼ばれている<sup>12</sup>。従って Udbhaṭa がこれを〈ラータ同子音反復〉の分類に応用したことは容易に想像がつく。Udbhaṭa は八世紀のカシミールの宮廷で活動した詩論家であり、当時の詩人達が用いていた〈飾り〉を体系化したと考えられるから、彼の詩論書に現れる〈ラータ同子音反復〉が GJM においても同じく情景を描写する詩節で用いられている事実は Gopadatta の活動年代を八世紀頃と推定する証左の一つとなろう。

### 2.3 \*Ajātaśatru

\*Ajātaśatru は有名なマガダ国王アジャータシャトルによる父王ビンビサーラ (Bimbisāra) の殺害と改悔を主題とする物語である。GJM 所収話は物語の最後部を欠き、また詩節には欠損が多数あるが、同音節群が反復されている用例を若干数見ることができる。まず冒頭の題辞を見よう。

[\*Ajātaśatru 2]

aho vibhūtir guṇavistarāṇām guṇābhdhikair yat saha samprayujya |  
guṇair abhūtaiv viguṇo 'bhyupeti guṇaprasiddhiṃ guṇabhūṣaṇeṣu ||

ああ美德を富とする者達は美德の海と結び付いた後で幸福を手にするのだから、性悪な者でも、諸々の未だかつてない美德のおかげで、美德を飾りとする者達の間で、美德の点で広く知られるようになるのだ。

<sup>11</sup> 第四詩節に対する例示詩節から補う。*Kāvyaḷaṃkārasārasaṃgraha* 1.\*3: tatra toyāśayāśeṣavyākoṣita-kuśeśayā | **ca**kāśe śālikimśārukapiśāsāmukhā **śa**rat || (「その場所は湖中に睡蓮を隈なく満開させ、稲の芒で四方が黄色く染まる秋の気配となった。」)。

<sup>12</sup> Daṇḍin が挙げる用例は次の通りである。テキストは DIMITROV ed., Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, 2011 のそれに従う。

[*Kāvyaḷadarśa* 3.52]

upodharāgāpy abalā madena sā madenasā manyurasena yojitā |  
na yojitātmanam anāgatāpitām gatāpi tāpāya mamāsa neyate ||

あの女は酩酊して紅潮していた。それなのに、私が犯した過ちは彼女を憤怒という情と結び付けてしまった。〔彼女は〕愛欲に苦しめられているけれど、自分〔の心〕を〔私に〕結び付けようとし始めない。彼女は私にこれほどまで〔大きな〕苦しみをもたらすことはなかったのだが。

b 句末と c 句頭の yojitā < yojita (< 動詞語根 yuj + NiC + Kta) は同一語で同一語形をとるが、〈行為実現要素〉(kāraṇa) を異にする。すなわち b 句末のそれは〈目的〉(karman) であり、c 句頭のそれは〈行為主体〉(kartṛ) である。kṛt 接辞 Kta が〈行為主体〉の意味で用いられる条件については Pāṇini 3.4.71: ādikarmanī ktaḥ kartari ca を参照せよ。〈同音節群反復〉を適用するために同ストラを前提とした文を用いている用例は七世紀の詩人 Mayūra の叙事詩 *Sūryaśataka* 第 38 詩節にも見られる。

なお *Nāṭyaśāstra* と Rudraṭa (九世紀) の詩論書に現れる同名の〈同音節群反復〉は Daṇḍin が定義するものとは異なるものであることには注意を要する。

それぞれ文中での限定対象を異にする *guṇa* 「美德」という語とそれに前接辞を導入し異なる意味を与えた *viguṇa* 「性悪な者」という語とによって同じ音節群が反復されているので、以上の例は〈同音節群反復〉と〈ラータ同子音反復〉の融合形に分類される。

次にアジャータシャトルが自らの行いを悔いて発する言葉を見よう。原文は次の通りである。

[\*Ajātaśatru 50–51, 53, 59]

ata eva jagau **jagad**varo **jagad**ālokakaraḥ kṛpāmayah |  
 bhagavān bhavabhoganiḥsprhaḥ sa hi karmasvakatām śarīriṇām || 50 ||  
 salilānalarājataskarair dhanam atraiva vilupyate nṛṇām |  
 prabhavanti (m.c. for *prabhavati*) tu tena karmanā svam ataḥ karma nṛṇām **śubhāśubham** || 51 ||  
**svajano jana**van nivartane gr̥havittādyaparair vilupyate |  
 svakṛtaṃ tv anuyāti dehinām bhavasamkrāntyanukūlavartinām || 53 ||  
 dhig avaraṃ **viśama**ṃ **viśayāśraya**ṃ sukham anāryaniṣevitam adhruvam |  
 yad upagamyā narā viśayadviśām iha bhavanti sadā karuṇāspadam || 59 ||

[50] まさしくこの理由で、憐みにあふれ、世界を光で照らす、生きとし生けるもののうちで最も優れたかの世尊は、生存世界における享樂の対象を求めず、実に衆生の諸々の業を己のものするとお語りになった。

[51] ヴァルナやアグニという盗人達によって人々が所有する富はまさしくこの世ではぎ取られてしまうけれども、人々がなす自身の浄不浄の業は、この時を過ぎてからも、その行いによって増えてゆく。

[53] 何もできなくなってしまうえば、身内の者も、ちょうど他人がそうされるように、家の財産などに心を奪われてしまった者達によって裸一貫にされてしまう。一方、生存世界から生存世界へと移動することに抗うことなく行動するのを常とする者達がなした自分の行為は〔彼等の〕後を追いかけてくるのだ。

[59] ああ快樂の何と忌まわしいものであることか。それは低俗なものであり、災いを招くものであり、感官に依拠するものであり、卑しい者達が追い求めるものであり、移ろい易いものだ。その快樂を得れば、およそ人というものは、絶えずこの世で、感官対象を嫌悪する者達の憐みを集めるものになるのだ。

第 50 詩節と第 51 詩節にそれぞれ *jagad* 「生けるもの」、*jana* 「人」という語による〈ラータ同子音反復〉、第 51 詩節に *śubha* 「清浄な」とそれに否定辞 *na* が導入された *aśubha* 「不浄な」という語による〈疑似同音節群反復〉、第 59 詩節に *viśama* 「低俗な」、*viśaya* 「対象」という語による〈同音節群反復〉が認められる。 *svajano jana*<sup>o</sup> という〈ラータ同子音反復〉は以下に見る *Bhavalubdhaka*、*Megha* の他、*Saptakumārikāvadāna* 第九詩節にも見出されるものである。

## 2.4 Bhavalubdhaka

*Bhavalubdhaka* は 109 詩節と散文部からなり、過去世で預流果を得ながらも生存世界への執着を断ち切れなかったために現世で私生児として生まれた比丘が前世の記憶を呼び覚まし、ブッダへの信心を生じて阿羅漢果を得たことを伝える物語である<sup>13</sup>。うち第 2–62 詩節は、阿羅漢果を得た比丘と、預流果を得たことに満足し輪廻生存の世界に固執する比丘との対話にあてられている。たとえ恐ろしい不幸を経験しようとも、その対価となる楽を得られるならばそれでよいという主人公の比丘に対し阿羅漢果を得た比丘は次のように言う。

[*Bhavalubdhaka* 18–19, 47, 51]

na varṇayanti kṣaṇikām apīśvarā bhavābhinirvṛttim avandhyavādinaḥ |

<sup>13</sup> 本話の梗概と並行話については、HANDURUKANDE [1984: (24)–(26)] を参照せよ。

tathā hy ayaṃ skandhakadambakodbhavaḥ samudbhavo naikavidhasya pāpmanah || 18 ||

**bhavaprabandhapraṇayo** manasvino jagaddhitādhānaparasya yujyate |

anuttarajñānanibaddhacetasāṃ **bhavodbhavo** 'bhāvasukhād api priyaḥ || 19 ||

pratyarthikair iva samudyatamaṇḍalāgraiḥ

skandhair hatā vyaṃ akāraṇabaddhavaṃsaiḥ |

āyāsītās ca **viśayair viśakumbhakalpair**

tac chidyatāṃ bhavasukhavyasanānurāgaḥ || 47 ||

anāśān asvantān sulabhavinipātāpratibhayān

savairān sodvegān saparibhavasamṭāpavirasān |

parityajyāyūṣmān vyaśanaviśikhāpātavihatān

**bhāvān** samyagmārgaṃ **bhavabhayaḥ** **bhāvaya** sadā || 51 ||

[18] いつも有益なことを語る偉大な者達は生存世界に一瞬の間ですら誕生することを褒めたたえない。というのも、一群の諸存在を構成する〔五つの〕要素の集まりがこのように生起することは様々な不幸が集まって生起することに等しいからだ。

[19] 生存の存続を求めるのは人々に利益をもたらすことにひたすら心を向ける聡明な者にふさわしいことなのだ。生存を離れることでもたらされる楽よりも<sup>14</sup>、生存の場所に生まれることを好むのは無上の知と心を結び付けた者なのだ。

[47] 我々は、理由もなく敵意を抱き半月刀を振り上げる相手のような、諸存在を構成する〔五つの〕要素の集まりに傷つけられ、毒の入った壺によってなされるように、感官対象によって苦しめられた。それゆえ生存世界の楽がもたらす不幸への執着を断ち切れよ。

[51] 希望を抱くことも、よい最期を迎えることもできず、すぐに訪れる破滅の恐怖におびえていなければならない、憎しみにあふれ、不快極まりなく、〔そこでは〕心が安らぐことなく、恥辱を味わい、苦しみ悶え、不幸という矢の降下に見舞われる生存世界を、長老よ、君はうち捨てて、生存に対する恐怖を除く正しい道を常に修めなさい。

第18詩節の例は udbhava「生起」と samudbhava「一緒に生じること」という語による〈疑似同音節群反復〉、第19詩節と第51詩節のそれは bhava「生存」と udbhava「生起」、bhāvaya (< 動詞語根 bhū の二人称・単数・使役・命令法・能動態) による〈ラータ同子音反復〉と〈同音節群反復〉の融合形、第47詩節のそれは viśaya「対象」と viśa「毒」という語による〈同音節群反復〉に分類される。第51詩節の融合形では bha-vā/a という音節群が bhā-va という不正確な形で反復されている。また第18詩節と第19詩節の例では前接辞を導入し異なる意味を表示させた語で同音節群が反復されている。

前世で生存世界への執着を断ち切れなかった比丘は、私生児として生まれた後、道端に捨てられ、自らの不幸が業によるものであることを知り、悲嘆の言葉を漏らす。

[Bhavalubdhaka 82–83]

matihutabhujā dagdhvā skandhapravṛttiviśadrumaṃ

sthiṭiṣu vaśītāṃ samprāpyāpi prakāśayaśotsavāḥ (m.c. for °yaśa-utsavāḥ) |

sakalabhuvanaśreyah kṛtvā **gatāḥ** **sugatāḥ** śamaṃ

viśayakṛpaṇāḥ kaṣṭaṃ naṣṭā vyaṃ bhavalubdhakāḥ || 82 ||

**sthānāsthānavivekayogaviduṣā** \***sthānena** samvarṇitā

skandhānāṃ kṣaṇikāpy anuttaragirā nirvṛttir āyāsini ||

sthāne prajvalitāṃs tarūn iva khagās tyaktvā bhāvān bhaṅgurān

nirvānti jvalanā ivāmbuvihatāś citteśvarā yoginaḥ || 83 ||

<sup>14</sup>HANDURUKANDE [1984: 123] はこの箇所を “the joy of contemplation” と解釈する。しかし bhāva を bhāvanā と同じ意味で解釈する根拠を挙げてはいない。

[82] 知性という火で諸存在を構成する〔五つの〕要素の集まりの働きという有毒な木を燃やし、心の不動をものにしてからも、燦然と輝く名声に喜びを見出す善逝達は全ての世界に幸福をもたらしてから入滅された。感官対象をむやみに求め<sup>15</sup>、生存世界を貪りながら死んでいった我々の何と惨めなことか。

[83] 理に適っていることとそうでないことを識別するすべを知っていて<sup>16</sup>、この上なくよい言葉を発する者は、諸存在を構成する〔五つの〕要素が一瞬の間にですら起こり、それが疲弊をもたらすということを道理に従って語る<sup>17</sup>。心を統御することに秀でているヨーガ行者は、炎を上げて激しく燃える木々を鳥というものが〔捨てる〕ように、移ろい易い生存世界を然るべき時に捨てて、水に打たれた火のように、消えていくものなのだ。

第 82 詩節に〈同音節群反復〉、第 83 詩節に〈同音節群反復〉と〈ラータ同子音反復〉の融合形が見られる。前者は gata 「赴いた」という語とそれに前接辞 su を導入した sugata 「善逝」という語から、後者は sthāna 「道理」という語とそれに否定辞 nañ を導入した対義語 asthāna 「非理」から構成されている。

第 98–109 詩節は生存世界への執着を断ち切った主人公の比丘が発した言葉にあてられているが、その第 106 詩節に〈同音節群反復〉の用例を見ることができる。

[Bhavalubdhaka 106]

niśamya ko nāma viḍambanām imāṃ pumān madīyāṃ śravaṇopatāpinīm |  
ratim prakuryād apariprutendriyo vicitrasmakleśasamudbhava bhava ||

私に関する耳に痛いこのような軽蔑の言葉を聞いて、未だ感官が〔対象に〕惹き付けられていない一体いかなる者が、様々な煩惱の苦しみを生む生存世界に対して楽しみを覚えたりしようか。

d 句末で bha-ve という音節群が反復されている。この例でも bhava 「生存」という同一語に前接辞 ut を導入し「生起」という異なる意味を与えた語で音節群が反復されている。

## 2.5 Matsarananda

Matsarananda は 81 の詩節と散文部からなり、前世の善業のおかげで裕福な商人に生まれながらも貪欲のために死後チャンダーラ女の醜い息子に生まれて生前の自分の息子と再会する苦果を得

<sup>15</sup>HANDURUKANDE [1984: 143] は d 句冒頭の viṣayakṛpāṇāḥ を “wretched because of worldly pleasures” と解釈する。しかしこれはごちない解釈である。APTE は kṛpāṇa の意味の一つに “avaricious” を挙げている。第十類動詞 kṛpāṇa 「欲する」はヴェーダ語に用例が見られるので、その派生元となった kṛpāṇa が「欲する」という意味で用いられていた可能性は想定できるが、APTE は典拠を示していない。viṣayakṛpāṇa という用例は Aśvaghōṣa (二世紀) の *Saundarananda* 第 14 章第 51 詩節 cd 句 (tataḥ pītvā prajñārasam amṛtavat tṛptahrdayo | viviktaḥ saṃsaktam viṣayakṛpāṇam śocati jagat) にあり、JOHNSTON [1928: 81] は “... , then he drinks the draught of wisdom as if it were nectar, and with heart appeased he reaches discrimination and deplores the world which is subject to attachment and greedy for sensual objects” (emphasis mine) と解釈する。ここではこの用例を根拠に viṣayakṛpāṇa を「感官対象を欲しがる〔我々〕」と解釈する。

<sup>16</sup>この複合語については別解釈も可能である。第二解釈としては sthānāsthānaviveka と yogavidvas という二つの複合語からなる同格限定複合語として「理に適っていることとそうでないことを識別でき、ヨーガの行に通じている者」という解釈が考えられよう。HANDURUKANDE [1984: 143] は第一解釈をとる。

<sup>17</sup>HANDURUKANDE [1984: 142–143] はこの箇所を sthāne na saṃvarṇitā と校訂し、“The development ... has not been praised as proper ...” と解釈する。確かに第十類動詞語根 saṃ-varṇa が「賞賛する」という意味で用いられることはあるが、ここでは単に「説明する」ということを言っているのではないか。仮に「賞賛する」と解釈した場合も、動詞語根 saṃ-varṇa が処格を支配して「x について賞賛する」という意味で用いられる用例は管見の及ぶ限り見出されない。ここではテキストを \*sthānena saṃvarṇitā と読み、「道理を用いて説明する」と解釈すべきではないか。



たナンダ (Nanda) の物語である<sup>18</sup>。本話ではナンダの吝嗇 (第 10 詩節)、チャンダーラへの転生 (第 12 詩節)、生前の息子との再会を描く詩節 (第 41 詩節)、ナンダが来世で受ける苦果をブッダが授記し貪欲を戒める詩節 (第 59、80 詩節) に同音節群が反復されている用例が見られる。

[Matsarananda 10, 12]

dr̥ṣṭvā parasyāpi sa deyadharmān īrṣyākāśāyākṣipuṭo babhūva |  
tyāgātmabhiḥ sārddham anāryakarmā cakāra naiva **krayavikrayaṃ** saḥ || 10 ||  
kṛtvā sa **karmāṇi** nikṛṣṭakarmā mṛtas tapasvī **mṛta** eva pūrvam |  
caṇḍālanāryāḥ pratisaṃdhibandham cakāra kuṅṣau kṣatalocanāyāḥ || 12 ||

[10] 他者の徳高い布施の品々を目にしただけでも<sup>19</sup>、彼は切れ長な目を妬みの心で濁らせた。行いの卑しい彼は喜捨をする性分の人々と決して商売をしなかった。

[12] 行いが下劣で憐れなる彼は諸々の業を積んで死んだが、彼はとつくの昔に死んでいたのだった。その彼は盲目のチャンダーラ女の腹の中に生をつないだ<sup>20</sup>。

第 10 詩節に〈同音節群反復〉、第 12 詩節 ab 句に〈ラータ同子音反復〉が見られる。ここでの〈同音節群反復〉も先に見た例と同じく、kraya「買うこと」とそれに前接辞 vi が導入された vikraya「売ること」という対義語からなるものである。

第 27–41 詩節では、チャンダーラ女の息子として生まれた商人ナンダが前世の自分の息子の家に物乞いに行くものの、その素性を知らない息子によって邪険に追い払われたことが物語られる。

[Matsarananda 28, 41]

sa tatheti pratiśrutya taṃ caṇḍālakumāarakam |  
daṇḍena prerayāmāsa paruṣāṃ **giram udgiran** || 28 ||  
sa bālabhāvāt kṛpaṇo varākaḥ svabhyastamātsaryatayā **tayā** ca |  
śūsoca bhaikṣaṃ kṣitiviprakīrṇaṃ na tu kṣaracchoṇitam ātmadeham || 41 ||

[28] 彼は「そういたします。」と答えて、乱暴な言葉を浴びせてそのチャンダーラの子を棒を使って追い払った。

[41] 彼はまだものも分からない年頃だったので、人々の憐れみを誘い、そのように繰り返し妬みの気持ちを起こすせいで惨めであり、地面に撒かれた施し物のことを思つて悲しむことはあっても、血の滴る自分の体を悲しむことはなかった。

第 28 詩節では gir「言葉」と udgirat「言葉を発する」、第 41 詩節では svabhyastamātsaryatā「頻りに嫉妬する性質」と指示代名詞 tad によって〈同音節群反復〉が構成されている。taddhita 接辞 taL が導入された名詞の具格・単数形と指示代名詞 tad の具格・単数・女性形を用いた〈同音節群反復〉は Jñānavatī 第 34 詩節に現れるものと同じである。

第 50 詩節以下は商人ナンダが来世で受ける苦果についてのブッダによる授記にあてられており、その第 59、80 詩節にそれぞれ〈疑似同音節反復〉と〈同音節群反復〉の用例が見られる。

[Matsarananda 59, 80]

āśāvighātabhayasaṃkucitāś ca dīno dehīty api prasahate kṛpaṇo na vaktum |

<sup>18</sup>HANDURUKANDE [1984: (23)–(24)] を参照せよ。この物語については PELLIOU が蒐集したコータン語写本の中に並行話が見られ、EMMERICK [1970] によって解題と訳注を付された英訳が発表されている。コータン語写本の並行話は父子の再開の場面で中断している。EMMERICK [1970] は解題で GJM の並行話に言及しており、GJM の並行話が引用されているケンブリッジ大学図書館所蔵の Avadānasārasamuccaya の写本 (BENDALL Cat, Add. 1598) に基づいて物語の梗概を示している。

<sup>19</sup>deyadharma については BHSD s.v. を見よ。

<sup>20</sup>pratisaṃdhi については BHSD s.v. を見よ。

yan nirdhano dhanavataḥ puruṣān akāle maunavratam tad api lobhakṛtaṁ nārāṇām || 59 ||  
 tasmāt pradānasalilaiḥ snapayantu santo mātṣaryapaṅkamalināni manogrāhāni |  
 lobhānalendhanam idaṁ nidhanam dhanam vo yāvan na yāti vipadagnīśikhāvalīḍham || 80 ||

[59] 時ならぬ時に資産をなくした惨めで憐れみを誘う者が、望みを碎かれることへの恐れから萎縮してしまい、資産ある人々に「施して下さい。」とすら言えないのは、貪りがもたらす沈黙という誓戒を人々が抱くからなのだ。

[80] それゆえおよそ善なる者は、妬みという泥で汚れた心という家を帰捨という水できれいにしなければならない。貪りという火をあおり、不幸という火焰に舐められている爾等のこの財産が消えてなくならないかぎり。

第 59 詩節で dhana 「財産」という語にそれぞれ前接辞 nis と taddhita 接辞 matUP が導入された nirdhana 「人」、dhavavat 「財産を有する人」という語による〈疑似同音節群反復〉が認められる。第 80 詩節では dha-nam という音節群が反復されている。同音節群を構成するのは indhana 「燃えたたせる」、nidhana 「帰滅」、dhana 「財産」という互いに異なる語である。ここでも前接辞 nis の有無によって異なる意味を持つ二つの語が音節群の反復に用いられている。

## 2.6 R̥ṣipaṇcaka

R̥ṣipaṇcaka は 93 詩節と対話の間に挟まれるごく短い散文部からなる物語であり、ブッダが前世で苦行者であった時、森で生活を共にしていた鳥 (vāyasa)、鳩 (pārāvata)、蛇 (bhujaga)、鹿 (mṛga) とこの世における最大の不幸は何かをめぐって議論する内容である<sup>21</sup>。

[R̥ṣipaṇcaka 1, 4, 10]  
 mūlaṁ malānāṁ pravādanti jātīm jātiprapaṇcopaśamaṁ pravīṇāḥ |  
 tathāgatāś cāvitathapratijñāḥ sambodhisattvāś ca viśuddhasattvāḥ || 1 ||  
 bahucchalaṁ so 'tha bahuvyālīkaṁ bahūpasargaṁ bahudoṣaduṣṭam |  
 apāśya gārhaṣṭhyam anarthamūlaṁ tapovanaṁ śāntam alaṁcakāra || 4 ||  
 abhyastanaīṣkramyasukhotsavānāṁ satām pravāsā iva gehavāsāḥ |  
 \*mṛgāṅganālūñcitapallavāni vanāni teṣāṁ bhavanottamāni || 10 ||

[1] 生まれながらに迷妄を消滅させることに秀で<sup>22</sup>、誓言したことを守る、清らかな性格をした如来、菩薩達は、生まれて来ることが諸々の不浄の根源だと明言する。

<sup>21</sup> 並行話については HANDURUKANDE [1984: (12)–(16)] を見よ。

<sup>22</sup> b 句の jāti、praśama の解釈が難しい。順に検討しよう。まず jātiprapaṇca° を HANDURUKANDE [1984: 3] は “false fancies relating to birth” と解釈する。しかし prapaṇca は sarvaprapaṇca といった同格限定複合語または niṣprapaṇca といった prādibahuvrīhi の前分として用いられるのが普通である。また「生まれることについての幻想」という解釈も漠然としている感が否めない。ここでの jāti は副詞的に kuśala を限定しているのではないか。これを支持する用例として Kāvyaṇṣakāśa 第十章 (第 91 詩節) の説明に引用される次の詩節がある。

unmeṣaṁ yo mama na saḥate jātivairī niśāyām  
 indor indīvaradaladr̥śā tasya saundaryadarpaḥ |  
 nītaḥ śāntiṁ prasabham anayā vaktrakāntyeti harṣāl  
 lagnā manye lalitatanu te pādayoḥ padmalakṣmīḥ ||

魅惑的な体をした女よ、思うに「私が夜に開頭することを許さない、私の生来の敵たる月が抱く美しさへの自負を、この月待睡蓮の花弁のような眼をした女が、顔の輝きで荒っぽくも鎮めるのだ。」という喜びから、蓮華の美しさは君の両足から離れることがないだろう。

Vaidyanātha の複註 Udāharaṇacandrikā (323.33) は問題箇所にも yo mama padmalakṣmyā jātivairī sahajaśatrur niśāyām unmeṣam udayaṁ na saḥate (「私すなわち蓮華の美しさの生来の敵 (jātivairī = sahajaśatrur) であり、夜中に〔私が〕開頭すること、すなわち生起することを許さない所の〔月〕」) という説明を与える (テキストは DURGA PRASĀDA and PAṆŚIKAR eds., Bombay: NSP, 1891 に基づく)。従ってこの用例を念頭に置くと、問題箇所の jāti は upāśama を限定する副詞として用いられていると見ることができよう。

[4] さて彼は欺瞞や苦しみ、不幸に満ち、多くの罪過が害をもたらす、災いの根源たる家住者の地位を捨てて、静かな苦行の森を美しいものとなした<sup>23</sup>。

[10] およそ世俗を離れることでもたらされる気持ちよい喜びを幾度も経験している善き者にとって家に住まうことは旅路にあることに等しい。そういう者にとっての最上の御殿とは牝鹿達に〔木々の〕新芽をむしり取られた森なのである<sup>24</sup>。

第一詩節 ab 句と第四詩節にそれぞれ jāti 「生」、bahu 「多くの」という語による〈ラータ同子音反復〉が見られる。第一詩節 cd 句では sattva という同一語に「優れた性質」、「衆生」という互いに異なる意味が与えられて sa-ttvā という音節群が反復されており、第 10 詩節では vāsa 「住むこと」とそれに前接辞を導入し意味を変えた pravāsa 「旅に出ること」という語で vā-sā という音節群が反復されている。

さてそれぞれ飢え (kṣudh) と色欲 (rāga) こそがこの世で最大の不幸だという鳥と鳩に対し、蛇は第 45–55 詩節で憤怒 (krodha) こそが最大の不幸だと言う。その第 52 詩節に〈ラータ同子音反復〉の用例が見られる。

[R̥ṣipañcaka 52]

yasmin rakto bhavati puruṣas tatra kuryāt priyāṇi  
dviṣto yasmai tadadhikatarāṇy apriyāṇy eva dhatte |  
alpāvadye 'vigatarajasā tena roṣaḥ praviṣṭaḥ  
**krodhaṃ krodhopaśamakuśalā vadyayoniṃ vadanti ||**

人が人に対して愛着を抱けば、その人に対して親切をなすけれど、人に対して憎しみを抱けば、実にそれ(= 親切)を上回る意地悪をなす。激情の消えていないそうした人は非の打ち

次に upaśama の問題に移ろう。HANDURUKANDE [1984: 3] はこれに “appeasement” という訳を与えるのみであるが、その解釈を支持する用例を提示すべきであった。なぜなら動詞語根 śam は通常自動詞として用いられるからである。従って動詞語根 śam から派生する行為名詞 sama (< śam + GHaÑ) は „Gemütsruhe” “平静”、 „Seelenruhe” “落ち着き”、 „Beruhigung” “安心” という意味を表示する。しかしこの箇所では kuśala 「秀でた」「巧みな」という語が後分要素として複合しているので「静まることに秀でた」という意味になってしまい不適切である。名詞 sama が他動詞の派生名詞として用いられている用例は Māgha (7–8 世紀) の Śiśupālavadha 第九章第 87 詩節にある (テキストは DURGĀPRASĀDA and PARAB eds., Bombay: NSP, 1906 に基づく)。

[Śiśupālavadha 9.87]

itthaṃ nārīr ghaṭayitum alaṃ kāmibhiḥ kāmam āsan  
prāleyāṃśoḥ sapadi rucayaḥ śāntamānāntarāyāḥ |  
ācāryatvaṃ ratiṣu vikaśanmanmathaśrīvilāsā  
**hrīpratyūhapaśamakuśalāḥ śīdhavaś cākṛur āsām ||**

このようにして月の光線は憾みという障害が一瞬に消失した女達を愛する男達と結び付けるに十分な力を発揮した。火酒は過度に酩酊させることで〔女達の〕色づきさを増しめ、恥じらいという妨げを鎮めることができるので、この女達に性愛について教示をなしたのであった。

Mallinātha 註は複合語 hrīpratyūhapaśamakuśalāḥ を hrīr eva pratyūho vighnas tasya praśame nivāraṇe kuśalāḥ 「恥じらいという妨げ (pratyūho = vighnas) を鎮めること、つまり退けることのできる〔火酒〕」と分析する。従って動詞語根 śam を他動詞の意味で用いる用例があったことがわかる。この用例を根拠に upaśama を他動詞 śam からの派生名詞と解釈する。

<sup>23</sup> この詩節には語彙の点で Āryaśūra の Jātakamālā 第一章第六詩節との類似が認められる。ĀJM 1.6: sa pūrvacaryāparisuddhabuddhiḥ kāmēṣu drṣṭvā bahudośajātam | gārhaṣṭhyam asvāṣṭhyam ivāvadhūya kaṃcid vanaprastham alaṃcakāra || (「彼は前世になした行いのおかげで邪念を完全に離れていたもので、諸々の愛欲の対象に多くの罪過の集まりを見て、病を払い除けるように、家住者の地位を払い除けて、どことも知れないが、山の頂にある森を美しいものにした。」)

<sup>24</sup> 原文疑問。HANDURUKANDE [1984: 6] は c 句を mṛgāṅganākuñcitapallavāni と校訂し “forests with tender shoots bent by the female deer” (p. 7) と解釈する。文法的には問題ないが、「牝鹿によって新芽が曲げられた森」というのはぎこちない解釈である。写本に異読がない点に問題が残るが、元の読みは \*mṛgāṅganāluñcitapallavāni 「新芽が牝鹿達によってむしり取られた(食べられた)森」ではないか。ここでは ākuñcita を \*āluñcita に改めて読む。

所のほとんどない人に腹を立てる。およそ憤りを鎮めることのできる人は「憤りは罪過を宿す場所だ<sup>25</sup>。」と言う。

d 句頭で *krodha* 「憤怒」という語が異なる語に介在されず *vadanti* (動詞語根 *vad* 「言う」の三人称・複数・現在・能動態) の〈目的〉、*upaśama* 「鎮める行為」の〈目的〉の意図で反復されている。

以上の蛇の見解に対し、鹿は死 (*marāṇa*) こそが最大の不幸だと述べ、死後の世界で味わう苦しみを述べる。

[R̥ṣipaṇcaka 65]

pariśuṣkagalāntarālanādāḥ saritām prāpya taṭāny udanvatīnām |  
anavāptajālaṁ mṛgāribhītā vayam utplutya **diśo diśam** vrajāmaḥ ||

首の中の食道がからからに乾いて、波立つ河の岸にたどり着いても水を得ることができず、我々は獅子達におびえて躍り上がり、方々から方々へと走って行く。

d 句末で *diś* 「方角」という語が *vrajāmaḥ* (< 動詞語根 *vraj* 「行く」の一人称・複数・現在・能動態) のそれぞれ〈起点〉(*apādāna*)、〈目的〉を意図して反復されている。

四匹の動物たちの見解に対し、ブッダはこの世に生を受けること (*jāti*) こそが最大の不幸だと述べる。

[R̥ṣipaṇcaka 75, 78, 85]

spardhamānā ivānyonyam upaghnanti vidāhinaḥ |  
**lokān** eva nirā**lokān** janmasambandhino malāḥ || 75 ||  
sphuṭabhrūbhaṅgavikṣepabhramadvikṛtalocanāḥ |  
kṣaṇenānya ivābhānti **puruṣāḥ** **paruṣā** **ruṣā** || 78 ||  
tasmā **jātiṁ** duḥkhaṁ **jātijarā**vyādhimarāṇanirmuktāḥ |  
**kathayanti** kathikavarā jinaḥ **jītakathaṁ****kathā**bījāḥ || 85 ||

[75] およそ生を受けることと結び付いた汚れというものは〔人々を〕疲弊させ、あたかも互いに競い合うかのようにして、実に盲目となった人々を害するものだ。

[78] 人は怒りを抱くことで、露骨に眉をしかめて動かして、目を震わせ三角にして険しい態度をとり、一瞬にしてあたかも別人のように映るものだ。

[85] それゆえ生まれることと老いること、病を患うこと、死ぬことから自由になり、説示する者達のうちで最も優れ、疑念の種を取り除いた勝者達は「生まれることが苦しみだ。」と語る。

第 75 詩節、第 78 詩節に〈同音節群反復〉が認められる。前者では *loka* 「世界」とそれに前接辞を導入した *nirāloka* 「光のない」という語の対格・複数形を用いて *lo-kā* という音節群が反復されている。後者では *puruṣa* 「人」、*paruṣa* 「粗暴な」の主格・複数・男性形と *ruṣ* 「怒り」の具格・単数形で *ru-ṣā* という音節群が反復されている。第 85 詩節では *ka-tha* という音節群を *kathayati* (< 動詞語根 *kathaya* の三人称・単数・現在・能動態) と *kathaṁkathā* 「疑念」という語で反復しようとした形跡があるが、反復される音節群が完全には一致しないのでこれは〈疑似同音節群反復〉に分類される。

## 2.7 Sarvaṁdada

*Sarvaṁdada* は自らの王国を敵国の王に与え、王権を捨てて苦行林に入ったサルヴァンダダ王の物語である<sup>26</sup>。物語は 85 の詩節と散文部からなるが、同音節群が反復されている詩節は二箇所の

<sup>25</sup>*vadya* については BHSD s.v. を見よ。

<sup>26</sup>同名の物語が Kṣemendra (11 世紀) の *Avadānakalpalatā* 第 55 章にあるが、GJM 所収話と内容を異にするものであることは注意を要する。*Avadānakalpalatā* 所収話の校訂テキストと和訳はその解題とともに岡野 [2008] に発表されている。

みである。

[Sarvaṃdada 4]

na tasya mātṣaryatamo'vaguṇṭhanam babhūva gātreṣv api mānasam yadā |  
tadā kathaivoparatāsukhāgate tṛṇopame śokanibandhane **dhane** ||

彼が、肢体に対してすら、羨望という闇に覆われた心を抱いていない時<sup>27</sup>、苦しみへと至らしめる、苦と結び付いている、草にも等しい富については、実に語るにも及ばなかった。

[Sarvaṃdada 74]

nārtho rājyasukhaiḥ punar mama calai riktair anāśvāsikair  
vairāyāsaviśādadainyakalahadvārāiḥ parapratyayaiḥ |  
utkaṇṭhām janayanti me kṣitid**harāḥ** saṃsaktadhārād**harāḥ**  
puṣpālambakadambapādapavanaśyāmopakaṇṭhāḥ śivāḥ ||

加えて、私は王権がもたらす楽が欲しいと思わない。それは移ろい易く、内実もなく、元氣を与えてくれるものでもなく、敵意と疲労、落胆、争いをもたらすものであり、他に縁っているものなのだから。私に欲求を生ぜしめているのは、雲がかかり<sup>28</sup>、花をつけたカダンバ樹の森で周りが青い色をした吉祥なる山々なのだ。

第四詩節では nibandhana「結合」と dhana「富」という相異なる語で dha-ne という音節群が、第 74 詩節では kṣitidhara「山」と dhārādharma「雲」という相異なる語で dha-rāḥ という音節群が反復されている。後者については、dhara「保持する者」という同一語に前接辞を導入するのではなく、相異なる前分要素となる語を複合させ異なる意味を与え〈同音節群反復〉を成立させている点に注目すべきであろう。

## 2.8 Sārthavāha

Sārthavāha は 61 の詩節と散文部からなる、商人達と航海に出たブッダが自分の命と引き換えに荒れ狂う海を鎮めて商人達の命を救ったことを伝える物語である<sup>29</sup>。同音節群が反復されている用例が見られるのは第四詩節のみである。

[Sārthavāha 4]

kharamakarakarāgrachinnabālpravāladrumarasaparibhogāpāṭalāvartacakram |  
viyad iva navasaṃdhyārāñjitāmbhodajālaṃ salilanidhiṃ udīkṣya trāsamūkās ta āsan ||

新しく迎える薄明で一群の雲が赤く染まった空のような、一群の渦が残忍な海獣の指で断ち切られた若い珊瑚樹の液を味わって赤みを帯びている海を見て、彼等は恐怖のあまり言葉を失った。

a 句第 4–7 音節で makara「海獣」と kara「手」という語からなる makarakara という複合語を用いて ka-ra-ka-rā という〈疑似同音節群反復〉が表現されている。また第 11–12 音節と第 14–15 音節

<sup>27</sup>a 句の複合語 mātṣaryatamo'vaguṇṭhanam については別解釈もありうる。ここでは mātṣaryatamasāvaguṇṭhanam yasya tad「羨望という闇によるそれ(=心)の覆い行為がある所のその[心]」という所有複合語に解釈する。

<sup>28</sup>HANDURUKANDE [1984: 83] はこの箇所を“mountains bearing uninterrupted streams”と解釈する。これは saṃsaktadhārā dharatīti という複合語解釈を想定した解釈と思われる。しかし dhārādharma は kośa 類や実作品の用例に従う限り「雲」または「剣」の意味で用いられる語である。むしろ saṃsaktā dhārādharā yeṣu「そこ(=山々)に雲々がかかっている所の[山々]」という処格所有複合語に解釈すべきではないか。

<sup>29</sup>大衆部系説出世部の仏伝 Mahāvastu、コータン語写本、漢訳經典に伝わる並行話については HANDURUKANDE [1984: (16)–(20)] を参照せよ。

では *bāla* 「若い」と *pravāla* 「珊瑚」という語で音節群 *bā-la* が反復されている<sup>30</sup>。

## 2.9 Megha

Megha は 115 の詩節と散文部からなり、マーンダートリ (*Māndhātṛ*) 王の前世マハーメーガ王がデカン地方を治めていた時、ヒマーラヤに住む辟支仏を自分の国に招待した物語である。この物語には 12 箇所、同音節群が反復されている用例を見ることができる。まず初めに物語の導入部を見よう。

[Megha 1–3, 6–7]

puṇyair vitṛptim upayānti na bodhisattvāḥ kāmāiḥ pramādina iva pratipattivāmaiḥ |  
 rājyāśrayāṇy api sukhāny avadhīrya dhīrāḥ **puṇyāya puṇyanidhayaḥ śramam āśrayante** || 1 ||  
 saṃtarpayāmāsa yataḥ sa lokam dānāmbubhiḥ sasyam ivāmbugarbhaḥ |  
 tato mahāmegha iti kṣitīśo yathārthanāmātiśayo babhūva || 2 ||  
 na tasya rājyadyutivistareṣu vyāsaktadīnam hṛdayam babhūva |  
**anarthabhūtān sa parārtham arthān** drumāḥ phalānīva babhāra sādhuḥ || 3 ||  
 babhūva tasya **graharājakīrtes tathāgraho** na svaparigraheṣu |  
 yathā tadīyāsu mamatvam āsīj janasya sampatsv atīśāyiniṣu || 6 ||  
 jāgrāha dānena sa kāmāścid eva priyābhīdhānair aparān vicitrāiḥ |  
**tathārthacaryābhir anarthabhīruḥ kāmāścit samānārthatayārthabhūtaḥ** || 7 ||

[1] およそ菩薩というものは徳を積むことに満足しない。およそ放逸なものが善行に相反する性愛というものにそうしないように<sup>31</sup>。徳を湛える器たる志操堅固な〔菩薩達は〕王権に依拠した諸々の快樂すら顧みず、徳を積むために辛苦することから心を遠ざけることがない。

[2] ちょうど雨雲が穀物をそうするように、彼は布施の品々という水で人々を満足させたので、「マハーメーガ (= 大きな雨雲)」という、実に適った名を持つ者達のうちでも抜きん出ている王となった。

[3] 彼の心は王としての十分な権力に対して執着することもなく、悲しみに沈むこともなかった。善良な彼は、他者のために、〔自分には〕何にもならない諸々のものを請け負った。木が実をつけるように。

[6] 惑星の王 (= 月) のような名声を歌われる彼は、人が彼のあふれるほどの富に対し関心を寄せるようには、自分の資産に対して強い執着を抱かなかった。

[7] 〔人々のうちには〕彼が施すことを通じて魅了した者もいれば、種々のやさしい言葉で魅了した者もいた。そしてまた〔人々に〕利益をもたらすものに等しい彼が、利益がもたらさ

<sup>30</sup> *b* 音と *v* 音の違いは、音節群が反復される時、問題視されない。 *Ekāvalī* 7.6–7: *ralayor ḍalayos tadval laḥayor bavayor api | namayor naṇayoś cānte savisargāvisargayoḥ || sabindukābindukayoḥ syād abhedena kalpanam | yamakam tu vidhātavyam kathamcid api na tripāt ||* (「*r* 音と *l* 音、*ḍ* 音と *l* 音、同様に *l* 音と *ḷ* 音、*b* 音と *v* 音についても、また *n* 音と *m* 音、*n* 音と *ṇ* 音、語末のヴィサルガの有無、アヌスヴァーラの有無についても違いはないから、〔これらを用いて〈同音群反復〉〕を作つてよい。しかしいかなる仕方であっても、三つの脚に起こる〈同音群反復〉を構成すべきではない。」) [Mallinātha 註 (189.15) に従い *tripāt* を *tripādaṇṭṭīyamakam* と解釈する]。テキストは TRIVEDI ed., Bombay: Government Central Book Depôt, 1903 に基づく。

<sup>31</sup> *vāma* の原義は „link“ “左の” で、転義的に „widerstrebend“ “逆らう”、 „widerspänstig“ “反抗的な” といった意味で用いられるが、複合語の後分として用いられることは稀である。複合語の後分として用いられているのは次の二箇所である。 *Haribhāṭṭajātakamālā* 32.60ab: *upadeṣṭari saty api pramādī na hi bālo mativāmatām jahāti |* (「たとえ教示する者がいたとしても、無知で放逸な者は実に知性と相容れない性質を捨てることがない。」)。 *Av-klp* 92.30: *kāmaṃ niyamavāmasya svādhīnānabhilāṣiṇaḥ | prāyeṇa vardhate jantor niṣedhenādhikādarah ||* (岡野 [2008: 111] 「確かに、禁戒を毛嫌いし自制を好まない人においては、禁止されることによって大抵はいっそう関心が増大するものである。」)。

れないことを恐れて、〔人々に〕利益をもたらす行いで魅了した者もいれば、相手と目的を同じくすることで魅了した者もいた<sup>32</sup>。

第1-2詩節に〈ラータ同子音反復〉、第3、6詩節に〈疑似同音節群反復〉、第七詩節に〈ラータ同子音反復〉と〈同音節群反復〉の融合形が確認できる。〈疑似同音節群反復〉の例では同一の graha という語に前接辞 aṅ ̣と pari を導入した āgraha 「固執」と parigraha 「資産」という語で音節群が反復されているが、gra-ha に対応する音節群は gra-ho、gra-he となっている。融合形の例では第七詩節 c 句頭と d 句末の artha はいずれも「利益」という同じ意味を表示するが、d 句末から二番目の artha は「目的」という意味を表示し、c 句頭から二番目の artha は否定辞 naṅ ̣が導入され anartha 「不利益」という異なる意味を表示している。

ヒマラーヤのメーガ王を王自らが訪れることに反対する大臣に対し、マハーメーガ王は自分の主張を曲げず自らの軍勢を率いて都を発つ。大臣の反論に王が答える詩節(第23-35詩節)に二箇所〈ラータ同子音反復〉の用例が見られる。

[Megha 31, 33]

kathaṃ nu tasmin na yateta buddhimān nibadhya yasminn abhilāṣamātrakam |  
asaṃstutānām api caikabandhutām **jano janānām** upayāti tatkṣaṇāt || 31 ||  
**guṇodgatā** eva **guṇoditeṣu** bhavanti pūjāpratipattinamrāḥ |  
ya eva ratnātiśayāntarajñās ta eva teṣv atyadhikaṃ yatante || 33 ||

[31] 単なる欲求に過ぎないものでも、人に対してそれを抱いてしまえば、知性をそなえた者であっても、一体どうしてその人を渴望しないことがあろうか<sup>33</sup>。そして人はその瞬間に、見ず知らずの他人であっても、その人達と同じ交友関係を築くことになる。

[33] 美德で気高い者達のうちでも、供養を実践する腰の低い者が美德の点で傑出した者に他ならない。実に諸々の良質の宝石の違いを知る者というのは、同じ者達の間でも、並々ならぬ努力をしているのだ。

第31詩節では jana 「人」という語が交友を結ぶ相手としての「人」、交友を結ぶ側としての「人」を意図して反復されており、第33詩節では guṇa 「美德」という語がそれぞれ udgata 「傑出している」、udita 「気高い」ことの理由を意図して反復されている。

さてメーガ王の国にたどり着いたマハーメーガ王はメーガ王から歓待を受ける。第49詩節以下はマハーメーガ王とメーガ王の長い対話にあてられているが、メーガ王の言葉の中に三つの用例を見ることができる。

[Megha 55, 58, 66, 101]

**krpā krpā**vastuṣu sampratāryate striyaḥ **krpā**vastu viśeṣataḥ satām |  
ato matir me karuṇānupātiniṃ priyāsu rājan na tu vibhramāturā || 55 ||  
tavaiva saphalaṃ janma sujīvitam tvaṃ ca **jīvasi** |  
aiśvaryaṃ tava pātrasthaṃ yathārthā śrīś tavaiva ca || 58 ||  
anujñātā tvayā rājann ime prakṣiṇakalmaṣāḥ |  
vasantu **dakṣiṇīyāgryā dakṣiṇā**pathabhūmiṣu || 66 ||  
aniketasamstavaparigrahāgrahāḥ svajane **jane** ca samatāvihāriṇaḥ |  
tribhavopapattigahanāntadarśino himavadvaneṣu ratim āpnuyuh kathaṃ || 101 ||

<sup>32</sup>HAHN [1996: 180, fn. 8] が指摘する通り、この詩節の各詩脚では布施 (dāna)、愛語 (priyavacana)、利行 (arthacaryā)、同事 (samānārtha) という四摂事 (saṃgrahavastu) が一つずつ列挙されている。

<sup>33</sup>HAHN [1996: 185, fn. 27] が言うように、ab 句の意味が明確でない。また a 句の主文に対応する複文にあたる b 句が定動詞を欠く点も奇妙である。HAHN [1996] は複文に定動詞 yatate を補うべきかと推定する。絶対詞が定動詞の代わりに用いられる用例は叙事詩に現れており (OBERLIES [2003: 285-287])、初期の仏教美文詩にも用例が見られるので、ここでは存在動詞 asti/bhavati が補われるべきであろう。

[55] 〔人は〕憐れみをさそう諸々のものに対して憐みの気持ちを広げます。優れた者にとって女というものは殊の外憐れみをさそうものです。このような理由で、私の思いは愛しい女達への憐みの結果生じているのであり、王よ、迷妄に苦しめられているのではないのです。

[58] 他ならぬ爾は実りある生を享け、よい生涯を送るでしょう。全てを意の尽にできる爾の力は受けるにふさわしいものの手中にあり、他ならぬ爾には望むがままの富があるのです。

[66] 王様、爾が御認めになった、汚れの消えたこの者達は崇敬に値する者達であり、最も優れた者達であり、南方の地に住むべきでしょう。

[101] 家を持たない者達を賞賛し、資産を所有せず、親族にも他人にも等しく愛を注ぎ<sup>34</sup>、三つの輪廻生存の場所に生まれることという密林の果てを示すことに秀でた者がヒマーラヤの森というものに対してどうして喜びを覚えたりしましょう。

第 55 詩節 ab 句と第 101 詩節 c 句に〈ラータ同子音反復〉、第 58 詩節 c 句と第 66 詩節 cd 句に〈疑似同音節反復〉、第 101 詩節 a 句末にそれぞれ〈同音節群反復〉が認められる。ここでの〈同音節群反復〉も他に多く見られるものと同様、graha という同一語にそれぞれ前接辞 pari、否定辞 nañ を導入し parigraha 「資産」、agraha 「所有しない」という異なる意味を与えた語から構成されている。

## 2.10 Nāga

Nāga は 62 の詩節と散文部からなり、蛇使いのバラモンに自らの毒牙を引き抜かれ頭頂の宝珠を抉り出されながらも、全てを前世の業の果と受け取り、そのバラモンに対し少しの怒りも抱かなかった龍王の物語である<sup>35</sup>。第 11–24 詩節はありとあらゆる手をつくして龍王に苦痛を与えるバラモンと、忍耐の力で苦しみに耐え自らの敵に憐みの心を起こす龍王の描写にあてられているが、そのうちの第 16、18、20–23 詩節で同音節群の反復がなされている。

[Nāga 16, 18, 20–23]

śvāsānilaiḥ sphuṭaviṣāgnikarākārālair (m.c. for *karakarālair*)

ucchoṣayet samakarān api yaḥ samudrān |

kṣāntiṃ priyām iva sakhīm upaguhya tasthau

svasthas tam eva ca ripuṃ karuṇāyamānaḥ || 16 ||

\*tīvrāpakāram upakāram ivāvīkārah seḥ kṛpāparigataḥ sa yathā yathāryaḥ |

krauryāvāleparaparūṣaḥ sa tathā tathā taṃ cikleśa pannagavaraṃ vividhair upāyaiḥ || 18 ||

sa pīḍyamānaḥ puruṣeṇa tena bhujaṅgarājo vigatavyathena |

tam eva rakṣaṇ guṇapakṣasākṣī mumoca na śvāsaviṣaṃ viṣādī || 20 ||

yathā yathā pīḍayati sma nāma tam āryakarmāṇam asāv anāryaḥ |

tathā tathāsau tadapāyaśāṅkī na cakṣur unmīlayituṃ viṣeḥ || 21 ||

parāpakārapratipattimārūtā durācarās tasya viśuddhakarmaṇaḥ |

kṣamāśīlādhāraparigrahasthiraṃ na kampayanti sma mano manasvinaḥ || 22 ||

ambhojareṇukanīkā iva sampratīcchan nāgottamaḥ kṣitirajo 'rkakaropataptam |

netropaghātapaṭunā paṭunā vimuktaṃ tasmin babhūva sutarāṃ \*paramānukampaḥ || 23 ||

<sup>34</sup>HAHN [1996: 198] はこの箇所を „die keinen starken Hang (mehr) zu einem festen Wohnsitz, zu Bekanntschaften und zu Besitz verspüren,“ と解釈する。saṃstava を „Bekanntschaften“ 「関わり合いを持つこと」という意味に解釈し saṃstavaparigraha を「関わり合いを持つことと所有すること」という並列複合語と考える訳である。文法的には問題ないが、saṃstava の語源的な意味は „Preis“, „Belobung“ 「賞賛する行為」であり、この意味での用例も多数見られる。従って a 句は aniketānāṃ saṃstavo yasya 「家を持たない者達 (= 出家遊行者達) を賞賛する者」と分析される所有複合語と parigrahasyāgraho yasya 「資産を所有しない者」と分析される所有複合語からなる同格限定複合語に解釈すべきはないか。この解釈をとれば saṃstava と parigraha の間に意味の切れ目と韻律 (mañjubhāṣiṇī) の休止両方を入れることができる。

<sup>35</sup>GJM 所収話の梗概とその並行話については HAHN [1995: 87–101] を参照せよ。



[16] 彼 (= 龍王) は毒を含んだ火が放つ煌々たる光で恐ろしい吐息の風で海獣達もろとも海を干上がらせることができたのだが、愛しい女友達を抱くように忍耐力を抱き続け、まさしくその敵 (= バラモン) に対しても憐みの気持ちを抱き、苦痛を覚えることがなかった。

[18] 気高く憐み深いそ〔の龍王〕が気分を損ねることもなく、あたかも好意〔を受け入れる〕ように酷い危害を受け入れれば受け入れるだけ<sup>36</sup>、冷酷さと高慢さのゆえに粗暴な彼は様々な手段を用いて龍のうちで最も優れた彼をなおさらいつそう痛め付けた。

[20] 良心の呵責に苛まれることのないその人間にその龍王は苦しめられた。〔しかし彼は〕徳に与する者を目にしていたので、まさしくその彼を守ろうとして、心打ち沈みながらも毒を口に含んだまま<sup>37</sup>、毒の混じった息を吐き出すことがなかった。

[21] その品性下劣な者が気高く振る舞う彼 (= 龍王) を実に痛めつければ痛めつけるだけ、彼 (= 龍王) は彼 (= バラモン) が悪い生に転生するであろうことを懸念したので、なおさら眼を開けるにしのびなかった。

[22] 他者に危害を加える行いという性悪な風は、行い清らかで聡明な彼の、石でできた土台のような忍耐の力をそなえた堅固な心を揺らすことはなかった<sup>38</sup>。

[23] 龍達のうちで最も優れた者は、眼を害することすら厭わない粗暴な者が投げた、太陽の光で熱せられた土埃を、蓮華の花粉の如く受け取り、彼をこの上なく、またひどく憐れんだ<sup>39</sup>。

〈ラータ同子音反復〉の用例はなく、〈同音節群反復〉の用例が二例 (第 21、23 詩節)、〈疑似同音節群反復〉の用例が三例 (第 18、20、22 詩節) 見られる。〈同音節群反復〉のうち一つは ārya 「聖なる」という語とそれに否定辞 nañを導入した anārya 「卑しい」という対義語によるものである。もう一つは paṭu という同一語に「可能な」、「粗暴な」という異なる意味を与えて同じ音節群を反復するものである。ここで注目すべき点としては、Gopadatta が第 16 詩節 a 句末で本来 karakarālair 「光で恐ろしい」とすべきを韻律のリズムを守るために karākārālair として〈同音節群反復〉を構成していることである。

<sup>36</sup>HAHN [1995: 111] は a 句冒頭を tivrāpakāram と校訂する。これに対する訳は „die Quälereien“ (p. 123) であり、tivrāpakāram を tivrāpakāram の意味で理解しているようである。しかし prakāra が apakāra と同じ意味で用いられる用例は管見の及ぶ限り見られない。また HAHN [1995] は自分の解釈を裏付ける根拠を挙げていない。tivrāpakāra という複合語の用例は Pāramitāsamāsa 第三章第 14 詩節 ab 句にある。tivrāpakārair api viprakārair na vikriyāṃ yānti satāṃ manāṃsi | (「およそ善き者達の心というものは、どんな酷い類のものであれ、危害を加えられて、悪い方向に向かうことはない。」テキストは SAITO [2005: 362] に従う) というものであるが、ここでの tivrāpakāra は viprakāra を限定する属格所有複合語であるから HAHN [1995] の解釈を補強するものではない。写本の裏付けがない点に問題が残るが、\*tivrāpakāram と読んでおく。

<sup>37</sup>d 句末の viśādī (< viśādin) については二つの解釈が可能である。第一解釈は viśādin を viśāda + taddhita 接辞 inI (Cf. Pāṇini 5.2.115: ata inīthanau) と分析し「落胆する者」と解釈するもの、第二解釈は viśādin を viṣam attīti という upapada 複合語として「毒を口ににする者」と解釈するものである。

<sup>38</sup>HAHN [1995: 234] は c 句を „das fest war, weil es von dem Gebirge der Duldsamkeit eingefaßt war“ と解釈する。これには二点疑問が残る。まず kṣamāśīlādhāra の解釈について、これを「忍耐という山脈」と解釈すると manas 「心」が「山」で囲まれていることになり意味が通じない。比喩基準を後分要素とする (upamānottara-pada) 同格限定複合語に分析し「山のような忍耐力」とでも解釈しなければならない。次に śīlādhāra という語についてであるが、HAHN [1995] はこれを「山」という意味に解釈する根拠を挙げていない。śīlādhāra が「山」という意味で使われている用例は筆者の管見の及ぶ限り見られない。字義通り「石でできた土台、基礎」と読んで問題はないのではないか。以上から本訳では c 句を「石でできた土台のような忍耐の力をそなえていて、堅固な〔心〕」と解釈する。

<sup>39</sup>原文疑問。HAHN [1995] は d 句末を sa parānukampaḥ と校訂し、„von höchstem Mitleid erfüllt“ (p. 124) と解釈する。しかし parānukampa は普通「最高の憐れみ〔を抱く者〕」ではなく、「他者に対する憐み〔を抱く者〕」を意味する語である (用例としては ĀJM 2.48, 4.10 を見よ)。しかしこの場合 anukampa の対象が d 句冒頭の tasmin なので「他者に対する憐みを抱く者」では文意が通じない。写本の裏付けがない点に問題が残るが sa parānukampaḥ は \*paramānukampaḥ の誤りではないか。

## 2.11 Kapīśvara

Kapīśvara は 62 詩節と散文部からなる物語で、前世で猿王 (kapīśvara) あったブッダが盲目の老いた母猿を森で養っていた時、無慈悲な獵師に母親ともども殺され、その獵師が地獄へ堕ちたことを伝える内容である<sup>40</sup>。冒頭の主題を提示する詩節 (第三詩節)、老いた盲目の母猿の身代わりになることを申し出るブッダに母猿が答える詩節 (第 41 詩節)、猿王を殺した獵師がその悪業によって炎に包まれ地獄に落ちたことを伝える詩節 (第 58 詩節) に同音節群を反復している用例がある。

[Kapīśvara 3]

śubhāśubhaiḥ **karmabhir** ārya**karmā** krīḍann ivāsau bhavaraṅgamadhye |  
nidarśayāmāsa vicitrarūpām upāyapūrvām upapattimāyām ||

かの行い高潔な方は生存世界という劇場の真ん中で清らかな行いや汚れた行いをなして遊んでいるかのように見えた。〔その彼は〕様々な姿形をとる、方便を前提とした、〔生存世界への〕再生という幻を示した。

[Kapīśvara 41]

tvam me hr̥dayasarvasvaṃ putrakocchvasimi tvayā |  
tvayi **jīvati jīvantīm** mām avehi mṛtām api ||

我が子よ、お前は私の心の全てです。お前のおかげで私は命をつないでいるのです。たとえ私が死んでしまっても、お前が生きている限り、私は生きていますと知りなさい。

[Kapīśvara 58]

anilākulitānālāvalīḍhaḥ kaṭudhūmaughaniruddhakaṇṭhatālūḥ |  
**nīpapāta** samut**papāta** cāsāv asakṛṇ mīna ivāturas tapasvī ||

風で勢いよく燃え盛る火に舐められ、刺激を与える煙の流れで喉の奥をふさがれて、その憐れな者は、苦しみもがく魚のように、何度も倒れては跳びあがった。

第三詩節と第 41 詩節にそれぞれ karman 「行為」、jīvat 「生きている」という語を反復した〈ラータ同子音反復〉を見ることができる。第 58 詩節には同一の動詞語根 pat 「落ちる」に相異なる前接辞を導入した動詞語根 ni-pat 「倒れる」と sam-ut-pat 「起き上がる」の三人称・単数・完了・能動態の形で pa-pā-ta という音節を反復した〈同音節群反復〉が認められる。

## 3 結論

以上 GJM 所収の 11 の物語における同音節群の反復技法の用例を見た。それらから次の事実を指摘できよう。

- (1) GJM 所収 Maitrakanyaka 物語で用いられている〈ラータ同子音反復〉は詩論家 Udbhaṭa (八世紀) が *Kāvyaḷamkārasārasaṃgraha* で例証するそれと同じ形式をとっている。〈ラータ同子音反復〉が用いられている詩節の内容にも類似が認められる。
- (2) 同音節群の反復技法が用いられている詩節の内容に共通性は認められない。
- (3) 詩節内で〈同音節群反復〉が起こる位置は不規則である。
- (4) GJM で用いられる〈同音節群反復〉の用例には、同一語に否定辞や前接辞を導入することで異なる意味を与えて反復しているものが多数ある。
- (5) 〈同音節群反復〉と〈ラータ同子音反復〉融合形の用例には、反復される音節が完全には一致しないものがある。

<sup>40</sup>GJM 所収話の梗概とその並行話については HAHN [1980: 136–139] を見よ。

(1) の事実は Gopadatta の活動年代を考える上で重要な手がかりを与える。彼の活動年代の上限は五世紀、下限は八世紀であり、両者の間には 400 年の隔たりがあるが、彼が Maitrakanyaka 物語で用いる〈ラータ同子音反復〉は Udbhaṭa 以前の詩論家の詩論書には用例が現れない。脚頭と脚末の語による〈ラータ同子音反復〉の用例が五世紀の *Haribhaṭṭajātakamālā* に見出されるのは事実だが、適用されている詩節に認められる特徴から判断して Maitrakanyaka に見られる〈ラータ同子音反復〉は Udbhaṭa の詩論書に現れるものにより近い。このことは Gopadatta が西暦八世紀頃に活動していた可能性を強く示唆しよう。山崎 [2016] 及び YAMASAKI [forthcoming] で指摘した、Gopadatta の物語作品 *Saptakumārikāvadāna* で使われる文体や韻律の特徴もこの可能性を支持する。

(2)–(5) の事実は Gopadatta の著作姿勢を知る上で興味深い示唆を与える。Kālidāsa (4–5 世紀) 以降の大美文作品 (mahākāvya) では同音節群の反復技法、特に〈同音節群反復〉が用いられる詩節は季節や戦争の描写にあてられた詩節が中心となる。〈同音節群反復〉が現れる位置も詩節の脚頭や脚末といった特定の位置に限定されることが多くなる。また時代が降れば降るだけ、大美文詩人は同一語に否定辞や前接辞を導入して意味を変えて反復し〈同音節群反復〉を成立させる形ではなく、動詞派生を全く異にする語を用いて同音節群を反復する形を好んで用いている。Māgha や Ratnākara (九世紀) といった大美文詩人がこぞってこの種の技を競い合ったことはよく知られていることである。以上から判断して Gopadatta が GJM を著すにあたり大美文作品の慣例に従っていたとは考えられない。

他方、戯曲作品に目を向けると、YAMASAKI [forthcoming] で述べた通り、(2)–(5) は概ね戯曲作品についても指摘できる特徴であることがわかる。以上の他にも GJM 所収の物語には、音節数の多い akṣaracchandas が多用されている点、物語の叙述にあてられる散文部に対し台詞に割り当てられる韻文部の占める割合が多い点など、七世紀頃の戯曲作品と共通する特徴が見られる。戯曲は本来、見る対象とされる美文作品 (dṛśyakāvya) であるから、その性格上、長い韻文や複合語が現れても、容易な理解を阻む複雑な音節群の反復は現れないのが一般的である。従って Gopadatta が戯曲作品を読み知っていて、その技法を GJM にとり入れた可能性は十分に考えられよう。GJM における同音節群の反復技法の用例には *Saptakumārikāvadāna* に見られるものと同じ特徴を認めることができると言えよう。

## 参考文献

- EHLERS, Gerhard 1980 “Das Jñānavatī-Jātaka aus der Jātakamālā des Gopadatta.” M.A. thesis, Philipps-Universität.  
 EMMERICK, Ronald Eric 1970 “Nanda the Merchant.” *BSOAS* 38-1: 72–81.  
 HAHN, Michael 1980 “Gopadatta’s Kapiśvarajātaka.” *JNRC* 4: 133–159.  
 — 1981 “Ajātaśatrvavadāna: A Gopadatta Story from Tibet.” In *K. P. Jayaswal Commemoration Volume, ed. by Jha, Jata Shankar*. Patna: Kashi Prasad Jayaswal Research Institute.  
 — 1995 “Der duldsame Nāgakönig: Gopadattas Nāgajātaka.” *BIS* 8: 87–135.  
 — 1996 “Die Einladung der Pratyekabuddhas: Gopadattas Meghajātaka.” *BIS* 9/10: 157–201.  
 — 2007a “Gopadatta’ Jātakamālā: On the First Complete Edition of Its 16 Extant Legends.” *JIBS* 55-3: 1043–1051.  
 — 2007b “Gopadatta’s Kapiśvarajātaka.” *Bulletin of Research Institute for Buddhist Culture Ryukoku University* 46: 47–74.  
 — 2011 *Poetical Visions of the Buddha’s Former Lives: Seventeen Legends from Haribhaṭṭa’s Jātakamālā*. New Delhi: Aditya Prakashan.  
 HANDURUKANDE, Ratna 1984 *Five Buddhist Legends in Campū Style: From a Collection Named Avadānasārasamuccaya* (= IndTib. Bd. 4). Bonn: IndTib Verlag.  
 HANISCH, Albrecht 2005 *Āryaśūras Jātakamālā: Philologische Untersuchungen zu den Legenden 1 bis 15* (= IndTib 43/1-2). Marburg: IndTib Verlag.  
 JOHNSTON, Edward Hamilton 1928 *The Saundarananda of Aśvaghoṣa*. Lahore: Oxford University Press. (Reprint: Delhi: Mothilal Banarsidass, 1975)  
 KLAUS, Konrad 1983 *Das Maitrakanyakāvadāna (Divyāvadāna 38)* (= IndTib Bd. 2). Bonn: IndTib Verlag.  
 OBERLIES, Thomas 2003 *A Grammar of Epic Sanskrit* (= Indian Philology and South Asian Studies vol. 5). Berlin · New York: Walter der Gruyter.

- OKANO, Kiyoshi 岡野 潔 2008 「*Avadānakalpalatā*55章、91–92章と *Karmaśataka*125–126話 *Sarvaṃdada*, *Śibi*, *Maitrakanyaka* の校訂・和訳」(「南アジア古典学」3: 57–156)
- SAITO, Naoki 齋藤 直樹 2005 *Das Kompendium der moralischen Vollkommenheiten: Vairocanarākṣitas tibetische Übertragung von Āryaśūras Pāramitāsamāsa samt Neuausgabe des Sanskrittextes* (= IndTib. Bd. 38). Marburg: IndTib Verlag.
- YAMASAKI, Kazuho 山崎 一穂 2016 「*Gopadattajātakamālā* における比喩表現について」(『東洋学研究』53: 39–53)
- forthcoming “On Ornaments of Speech in Gopadatta’s *Saptakumārikāvadāna*.” *JIBS* 65-3.

(やまさき かずほ、公益財団法人中村元東方研究所専任研究員 [インド哲学])

On Ornaments of Sound in Gopadatta's *Jātakamālā*

Kazuho Yamasaki

The *Jātakamālā* (GJM) by Gopadatta, a Buddhist poet active between the fifth and eighth centuries CE, is a collection of fifteen Buddhist legends written in a mixture of verse and prose. HAHN 2007a, who conducts detailed analyses of the structure of the GJM, gives little attention to its literary background. This paper considers what literary tradition influences the GJM, focusing on the examples of the repetition of the same string of syllables.

The examples of the repetition of the same string of syllables found in the GJM are classified into four groups: (a) *yamaka* (an ornament of sound in which a part of a verse is repeated twice or more with different meanings), (b) *lāṭānuprāsa* (an ornament of sound in which a word is repeated with no change in meaning but with a change in intention in a sentence), (c) pseudo-*yamaka* (an ornament of sound that seems to be *yamaka* but does not meet the conditions for *yamaka*), and finally (d) mixture of *yamaka* and *lāṭānuprāsa*. A closer scrutiny of these examples reveals the following:

- (1) *Lāṭānuprāsa* is used more frequently than *yamaka*.
- (2) Gopadatta, in the legend of Maitrakanyaka, uses *lāṭānuprāsa* in accordance with the rules illustrated in the *Kāvyālaṃkārasārasaṃgraha* by Udbhaṭa (ca. the eighth century CE).
- (3) There is no consistency in the subject matter of the verses where the repetition of the same string of syllables occurs. It is to be noted in passing that the great poets (*mahākavis*) conventionally use *yamaka* in the verses that are devoted to the description of seasons or a battle.
- (4) The part of a verse in which the repetition of the same string of syllables occurs is specified neither as to length nor as to position.
- (5) Gopadatta often constructs a *yamaka* with words to which different meanings are given by the addition of prefixes as in *apakāram upakāram*, which is rare in the works of the great poets.

These facts show that Gopadatta lived around the beginning of the eighth century CE, and that he does not conform to the demands of the great poets who meticulously observe the rigid rules concerning *yamaka*. We may therefore conclude that Gopadatta, making use of dramatic works, wrote the GJM, since *lāṭānuprāsa* is one of the ornaments of sound of which seventh- and eighth-century dramatists are particularly fond.